

直腸破裂をきたした例があつた。肛門ブジの挿入、高圧浣腸、直腸鏡検査で直腸の損傷をきたしたばあいもあるが、これも特別のばあいである。

最も診断を困難にし、重篤化の危険が被われているばあいは、合併損傷のあるときである。すなわち頭部損傷などによる意識障害のあるとき、胸部損傷のため呼吸循環系の症状が強く出ているときなどである。

ま と め

わが教室および関係者の経験した腹部損傷 115 例について検討しえた一部を述べた。診療状況について都会地と地方とではいちじるしい差違のあること認めたが、交通外傷による支配的変貌を明らかにした

文 献

- 1) Allen, R. B. & Curry, G. J.: Abdominal Trauma: A Study of 297 Consecutive Cases. Am. J. Surg., 93 : 398, 1957.
- 2) Berman, J. K., Habegger, E. D., Fields, D. C. & Klemer, W. L.: Blood Studies as an Aid in Differential Diagnosis of Abdominal Trauma. J. A. M. A. 165 : 1537, 1957.
- 3) Byrne, R. V.: Nonpenetrating Wounds of the Abdomen, Arch. Surg. 74 : 786, 1957.
- 4) Bailey, H.: Surgery of Modern Warfare. 3rd Ed., Vol. II. 1944 Williams and Wilkins.
- 5) Frimann Dohl.: Roentgen Examinations in Acute Abdominal Diseases, Thomas 1960.
- 6) Kennedy, R. H.: Non-penetrating Injuries to the Abdomen, Arch. Surg. 75 : 957, 1957.
- 7) Kennedy: Non-penetrating Injuries of the Abdomen. Thomas. 1961.
- 8) Martin, J. D., Perdue, G. D. & Harrison, W. H.: Abdominal Visceral Injury due to Non-penetrating Trauma. Arch. Surg. 80 : 192, 1960.
- 9) National Research Council: Military Surgical Manuals. Vol. III, Abdominal and Genito Urinary Injuries. 1942 Saunders Co.
- 10) Indication for Operation of Abdominal Trauma. Surg. 46 : 461, 1959.
- 11) Shafter, G. W.: Indications for Operation in Abdominal Trauma, Am. J. Surg. 99 : 657, 1960.
- 12) Williams, R. D. & Zollinger, R. M.: Diagnostic and Prognostic Factors in Abdominal Trauma, Am. J. Surg. 97 : 575, 1959.
- 13) Currie, R. A. et al.: Blunt Abdominal Trauma, Am. J. Surg. 107, 2, 1964.
- 14) 勝屋弘辰: 腹部外傷, 日本外科全書, 18 巻, 1~105, 1957.
- 15) 大村泰男: 腹部外傷の臨床, 中外医学社, 1960.
- 16) 前田友助・林周一: 交通外傷, 金原出版, 1961.
- 17) 齊藤誤・蟹江弘之・松林富士男: 交通事故による腸管損傷について, 交通障害, 1962.
- 18) 齊藤誤・片岡一朗: 急性危険症の最新返還, 腹部外傷, 診断と治療社, 1962.
- 19) 橋本義雄: 交通傷害, 金原出版, 1962.
- 20) 山田真治: 臓器損傷を伴った腹部外傷について, 災害医学, 7 巻 2 号, 1964.

「写真解説 病院管理」 聖ルカ国際病院 橋本寛敏著

■ 医学書院出版だより ■

橋本寛敏先生は、わが国近代病院管理の大先覚者であり、最高の指導者であることを疑うものはない。今回上梓された本書は、先生みずから執筆された「病院管理」書であつてしかもユニークな写真解説という方法をもつて、先生畢生の創作品聖ルカ病院を対象として具体的に解説を試みられたものである。

既に数年前に、写真解説「近代病院の設備と機能」として出版されたが、今回は大改版し、新たな構想の下に病院管理として体系化されたものであつて、全く面目を一新したものである。いわば橋本先生の病院管理の理念を世に問うものと理解されるものであつて、病院関係者が大いに注目しなければならない著書である。病院管理というものは本来実際のあつて、実際の経験からその原

則が生まれてくるものである。しかしその実際は、人道主義と合理主義に貫ぬかれていなければならない。聖ルカ病院は、創立者トイスラ博士の信念であつた「この病院はキリスト教の教える愛の力を顕現するために生きて働く有機体である」というスピリットの上に顕現された、わが国病院界の金字塔である。そしてこの顕現こそ橋本院長の手によって完成されたものである。数十年にわたる先生の不拔の信念と非凡の明察と手腕が今日の聖ルカ病院を築き上げたものである。病院管理研修所が 15 年前に発足した当初から、104 回の研修会のたびに欠かさず当院を見学病院とし、7,000 名を越える研修者にこの病院を見学せしめたことも、この人道主義と合理主義の上に顕現された病院管理の実

際を感得せしめる趣旨に外ならない

今回本書が上梓され、これをひもどくことによつて、数百葉の体系化された聖ルカ病院のあらゆる機能の写真を目の前にしながら、著者の信念と体験からほとぼしる筆致によりしかも先生独特の誰にも解り易い気品の高い麗筆によつて、トップマネジメントから、病院の舞台裏までたやすく理解することができるようになったことは、計り知れない有難い贈物を恵まれたといわねばならない

本書は、単に病院管理の知識を与えるばかりでなく古きものも新しきものにとつて、病院管理へのつきない英智と激励を与える指導書として、聖ルカ病院と共に不滅の存在をつづけることを信ずるものである。

(病院管理研究所長 吉田幸雄)